三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　2015,　第 35 号，53 － 58 頁

教育実践総合センターにおける現職教員研修プログラムの開発と実践

下村　勉*・須曽野仁志*

概要：ICT の教育利用が進む中、教員の ICT 活用指導力の育成が大きな課題である。本稿では、教育実践総合センターが、三重県教育委員会から派遣された教員内地留学生を受け入れ、改善を加えながら実施してきた研修プログラムについて整理を行い、成果と課題を明らかにする。研修プログラムの中で、重視してきた「学習支援研究会」の活動、とりわけ学術振興会の科学研究費への応募、学会等での研究発表、ICT 夢コンテスト、統計グラフコンクールなどで、大きな成果が得られるようになった。

キーワード：現職教育、参加型研修、ICT 活用指導力、学習支援研究会、科学研究費、Moodle

1．はじめに

少子・高齢化社会において、大学は、社会人や高齢者を対象とする継続教育・生涯教育への要請が増している。教育学部では、教員のための現職教育がこれに当たる（教員免許更新講習はその一例）。筆者が所属する教育学部附属教育実践総合センター（以下、実践センターと略す）は、前身である教育工学センター設立当初から現職教育に力を入れてきた。現職教員を対象とした公開講座・研修講座や研究会の開催、教員内地留学生の継続的受け入れ（1 年間、5 名）などである。実践センターで受け入れた内地留学生は、1991 年度より始まった情報教育内地留学でのべ 98 名、2004 年度より受け入れた教育臨床内地留学はのべ 33 名、総計 130 名を超える。また、内地留学後に大学院に入学したいわゆるリピーターは 9 名を数える。なお、本稿では、筆者らが担当した「情報教育内地留学」を中心に述べる。

これまでの活動経験から、筆者らがとらえる現職教育（教員研修）の問題点は以下のとおりである。

① 教育現場の多忙化や予算の削減により、教員が自主的・継続的に研修する機会が減少している。新しい理論や技術にふれることなく、従来型の教育（一斉指導）が繰り返されやすい。

② 学習者や教育環境や指導方法の多様化が進み、教育実践においても研究的な能力が必要とされているが、教員の研究実践能力は不十分である。

③ パソコン・ネットワークなどの ICT（情報通信技術）は強力な学習支援ツールであるが、それを教育に活用できる教員が少ない。

④ 実践センターの現職教育の継続的な取り組みにより、誇れる実績を上げてきているが、まだ局所的な取り組みのために広がりが少ない。

* 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

2．教育実践総合センター現職教育の目的と特徴

2．1　目的

本研究では、以下の 2 つを目的とする。

1）参加型授業を促進する現職教員研修プログラムの開発・体系化

教育学部の現職教育機能の拡大をめざし、参加型教育を推進できる現職教育プログラムを開発・体系化する。具体的には、3 つの能力、①学習支援能力、②研究実践能力、③ICT 活用能力、の育成を重視する。また、これまでの現職教育の取り組みや実績を整理し、今後の資料として役立てる。

2）継続的な研究会・研修講座の充実と実践交流の促進

これまで実践センターが取り組んできた「学習支援研究会」や「iCERP（アイサープ）研究会」を継続し充実をはかるとともに、成果と課題を探る。また、これらの活動を通じて、実践センターの活動に対しての理解を得る。

2．2　方法

(1) 現職教員研修プログラムの開発・改善

これまで実践センターで受け入れた情報教育内地留学生に対して実施してきた研修内容・方法を振り返り、教員内地留学における 1 年間の研修プログラムの開発・改善を行う。たとえば、社会的構成主義の考え方、役立つ学習支援スキル、ICT 活用、ファシリテーターとしての学部授業への参加、先輩の経験の継承、科研費の申請、研究会や学会への参加、研究成果の発表などである。

(2) 研究会・研修会の開催

実践センターで継続している定例的な研究会「学習支援研究会」（年 12 回）を開催している。内地留学生は幹事として会の企画・運営に携わる。1985 年に発足した学習支援研究会は 2015 年 9 月で 30 周年（月例会 360 回）

を迎える。

(3) 研究成果の発表（教育実践成果発表会の開催）

研究成果を実践センター主催のアイサープ研究会（研究成果発表会）や三重大学主催の三重大学アカデミックフェアなどで研究成果を発表する。

2．3　特徴

① センターの現職教育の豊富な経験と実績（学習支援研究会は 29 年、アイサープ研究会は 10 年）を生かす取組とする。

② ICT は強力な学習支援ツールという考えで、コンピュータとネットワークを活用する。とくに Moodle を学生の相互交流、学習成果の共有・継承に役立てる。

③ 科学研究費の申請や学会での発表、統計グラフコンクール、などに積極的に参加して、研究実践能力や表現能力の育成に役立てる。

3．参加型教育を促進する現職教員研修プログラムの開発

本プログラムでは、以下の 3 つの力の育成を重視しながら、研修プログラムの開発・改善を進めた。

(1) 学習支援能力の育成

学習者の積極的な参加を促し、PISA 型の学力を養うためには、一斉指導能力に加えて、学習支援能力を育成する必要がある。教員は、一斉指導能力は、過去の経験の蓄積と日々の実践で鍛えられているが、学習支援能力については、不十分な場合が多い。学習支援スキルを学ぶとともに、学部の授業へチューターやファシリテーターとしての参加することを重視する。

(2) 研究実践能力の育成

研究テーマの設定から、研究成果の発表にいたる一連のプロセスを指導する。科学研究費補助金などへの研究助成の申請、ゼミや研究会での報告を経て、学会等への成果発表を奨励・指導する。

(3) ICT 活用能力の育成

パソコンを利用しての情報生産や、e ラーニングシステム（Moodle）を活用して、学習者間の相互交流や学習成果の共有・蓄積をはかる。学習成果・研究成果は、Web を通じて積極的に情報発信する。

3．1　初期（準備）プログラム

(1) 内地留学説明会の開催

3 月の上旬に内地留学説明会を開催する。三重県教育委員会と連携をとって、県教委の説明会の後に開催する。内地留学生とセンター教員との初対面の場となる。3 月の実践研究成果発表会への参加を強く勧める。また、内地留学生とも会って、交流・引き継ぎの時間をとる。異分野・異年齢の人との交流が視野の拡大や楽しさにつながることを伝える。

(2) 実践研究成果発表会（3 月アイサープ研究会）への参加

前年度の内地留学生の成果発表があるので、これに参加することは、とても重要である。1 年後の自分の姿がイメージでき、これからの取り組みに対する真剣な姿勢が期待できる。

(3) 内地留学ガイダンスの実施

登校の初日に実施する。内地留学の意義や目的から、当面の学習課題（センターの学習環境や過去の研究の蓄積の理解）などを説明する。

(4) 過去の内地留学研究成果報告書の閲覧

これまでの内地留学生の成果報告書を読むことを奨励する。とくに、付録部分に具体的な成果物があるので留意する（逆に報告書作成時には、次の人のために役立つ内容を入れるように指導する）。

3．2　大学院授業および学部授業への参加

内地留学生は、指導教員と相談のうえ、指導教員担当の大学院授業や学部授業に参加する。大学院授業では、他の院生と同等に参加し、学部授業では、教師の援助者としての役割を持つ。自分の研究の進捗状況を報告し、参加者で討論する「大学院ゼミ」が最も基本となる。ゼミでは、PowerPoint などのプレゼンソフトを用いた発表を行うが、内容とともにプレゼンテーションの仕方についても指導を行う。内地留学生は、必要に応じて、他の科目も受講するが、あまり多く受講しすぎて、研究時間を削らないことが重要である。

3．3　研究会・研修講座への参加・運営協力

(1) 学習支援研究会

実践センターの教育工学部門・教育実践研究部門が中心で運営している研究会に「学習支援研究会」がある[1]。毎月 1 回、18：30〜21：00 まで、会員による数件の話題提供とディスカッションが行われる。夏には合宿研究会がある。会員は過去の内地留学生が多い。現役の内地留学生が幹事役を担当し、会の案内や運営に貢献するとともに、内地留学研究の経過を発表し、アドバイスを受ける。

このほか、内地留学生は、夏期に開講される教員免許更新講習や社会教育主事講習などにも協力者としての役割を持ちながら参加する。

3．4　現職教員の科研費申請の支援

学術振興会の科学研究費補助金に現職の教員が応募できる「奨励研究」の枠がある。毎年 10 月に公募があり、12 月上旬が締め切りである。

この科研費の申請を支援しているが、その理由は、①

自分の研究目的や計画が明確になる、②限られた紙面に論理的にわかりやすく記述する力が鍛えられる、③採択されれば研究の推進に役立つ、などである。

2008 年度より、支援の方法として、e ラーニングシステム Moodle を取り入れた。すなわち、従来の申請者と指導教員とのやり取り（個別指導）だけでなく、他の応募者もお互いに気付いたことを交流しあうようにする（相互啓発の追加）。

3．5　学習成果・研修成果の発表

(1) 統計グラフコンクールへの出品

筆者が開講する「教育工学演習/メディアリテラシーと情報表現 1」や「情報科教育法」の授業の一部で、表計算ソフト「エクセル」を用いてグラフ作品を制作しているが、その中の優秀作品を「統計グラフ三重県コンクール」に出品する。この授業を受講する内地留学生にも出品を奨励している。パソコンを用いてのグラフ作成、描画などの ICT 活用能力、1 枚のポスターに伝えたい情報を効果的に表現する情報表現力の育成に役立つ。ここで学んだ ICT 活用技術は、後に続くアカデミックフェア・ポスターセッションやアイサープ研究会でのポスター発表に役立つことになる。

(2) 研究の中間発表（8 月）

8 月の学習支援研究会の合宿研究会にて中間発表を行う。このときは、参加者の全員発表を行うため持ち時間は十分ではない。11 月か 12 月には、研究会のトピックスとして、再度、研究の進捗状況を発表する。

(3) アカデミックフェア（2 月）への出展

三重大学（三重大学高等教育創造開発センター）主催の「アカデミックフェア」のポスターセッションに、センターの内地留学生に研究成果を中心に毎年複数件を出展する。A 0 サイズのポスターに、研究内容を分かりやすくまとめ、当日の参加者に対して、説明し、交流をはかる。

(4) アイサープ研究会にて成果発表（3 月）

実践センター主催で毎年 3 月に教育実践研究の成果発表会を行っている。内地留学の研究成果が学校現場で報告される機会が少なかったので、実践センター主催で報告会を開くことにした（2003 年 3 月）。2004 年度には iCERP（アイサープ）研究会の名称のもとに開催されて現在まで続いているが、研究成果発表会が中心である。

毎年、三重県教育委員会の共催および津市教育委員会の後援を得て、連携協力の場としても機能している。

また、学習支援研究会やアイサープ研究会での研究発表をさらに深めて、関連の学会や研究会等での発表につなげていくようにしている。

(5) 内地留学研究成果報告書の作成

内地留学 1 年間の成果を報告書冊子にまとめる。研究テーマから離れた研究資料や授業等での学習成果も付録として残してもらう。次の内地留学の人の役に立つことを意識して作成してもらっている。ページ数は指定していないが、100 ページを超える場合もめずらしくない。

4．取り組みの成果と考察

4．1　学習支援研究会

毎月 1 回、計 12 回の定例会を開催し、2015 年 10 月の時点で、第 350 回を迎えた（ただし、毎年 3 月例会はアイサープ研究会と兼ねている）。例会の参加者は 10 名から 20 名程度であり、あまり大きな変化はない。会員が学会などで発表にむけてのリハーサル的な位置づけで発表することも多くなっている。話題提供者（発表者）の確定が遅れ、案内が直前になってしまうことがある。早めの案内が改善点である。来年度は 30 周年（通算 360 回）を迎えるので、活動を見直して一層の充実をはかりたい。

写真 1　学習支援研究会月例会（2010.1.28）

4．2　統計グラフコンクール

統計グラフ三重県コンクールには、2008 年度以降毎年出品している。2014 年度は、「パソコン統計グラフの部」に、教員内地留学生 2 名、学生 4 名の計 7 作品を出品した。県知事賞 1 件、教育長賞 1 件、佳作 1 件、努力賞 2 件、計 5 件が入賞するという好結果を得ることができた（図 1）。この中で上位入賞者 2 件の作品は全国コンクールに出品され、2 件とも佳作に選ばれた。県知事賞と教育長賞は最近 3 年間の連続受賞である。

4．3　アカデミックフェア

センターの内地留学生と院生を中心に毎年ポスターを出展している。その中から、2007、2008、2009、2012 年度の内地留学生がポスター大賞を受賞した（2013 年度からコンテストは行われていない）。

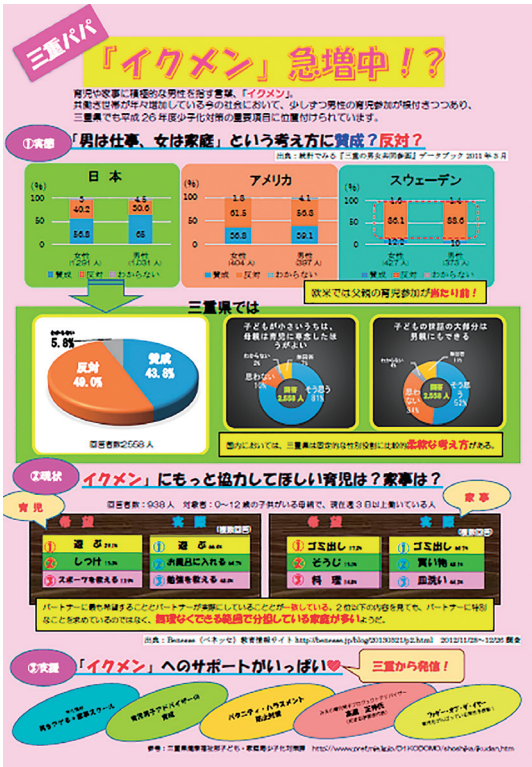

図１　Ｈ26年度三重県知事賞を受賞した統計グラフ
（高橋倫子、2014.10）

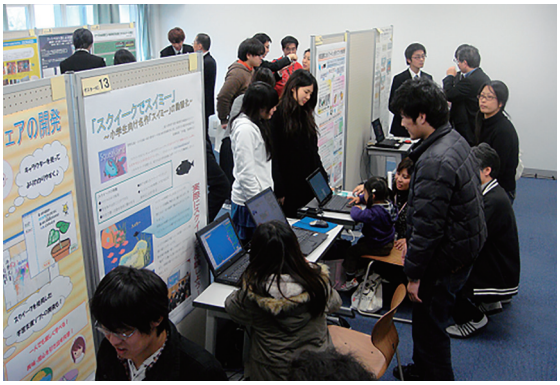

写真２　アカデミックフェア・ポスターセッション
（2010. 2. 13）

４．４　iCERP（アイサープ）研究会

実践センター主催のアイサープ研究会は毎年3～4回開催している。なお、iCERPは、実践センターの英文名称の頭文字をとって作られた略称で、アイサープと呼んでいる。

このうち、毎年3月に実施されるアイサープ研究会は、内地留学生の研究成果の発表の機会となっている。こうした内地留学生の研究成果発表会は、2003年3月に「学校現場の課題－カウンセリング・情報教育・授業改善－を考える会（内地留学生研究成果発表と特別講演）」が始まりであり、2004年度からアイサープ研究会として引き継がれている。2003年当時の発表者はセンター所属の内地留学生・大学院生の7名だけであり、当日の参加者も50名に満たないものであった。その後、実践センター以外の発表者も増え、2013年度は発表14件、ポスター発表7件、参加者86名を記録するにいたった（写真3参照）。

写真３　アイサープ研究会の様子（2009. 3. 26）
（会場はメディアホール、左手奥はポスターセッションの発表パネル）

４．５　内地留学経験者の科研費等の採択実績

実践センター教員（下村・須曽野）が支援した科学研究費（奨励研究）申請についての最近6年間の採択実績は、図2のとおりである。

Moodleを使っての支援を2008年度から始めたが、このMoodleへの登録者（応募者）は今年度は9名（昨年も同数）であり、指導・助言はセンター教員の2名が行った（図3参照）。各応募者がフォーラムに申請書をアップし、指導者を含め、みんなで気づいた点をコメントしあい、改善版を再アップすることを行った。9件の申請に対して、メッセージの数は120個（1件あたり13.3個）であり、昨年よりも増加していた。2013（H25）年度は、9件中の5件（採択率55%）、そして、2014年度は10件中9件が採択される（採択率90%）という驚くべき結果を残した（一般的な採択率は約20%である）。

なお、科研費以外に上月情報教育研究助成事業にも内地留学生が応募することを奨励し、2003年度から8年

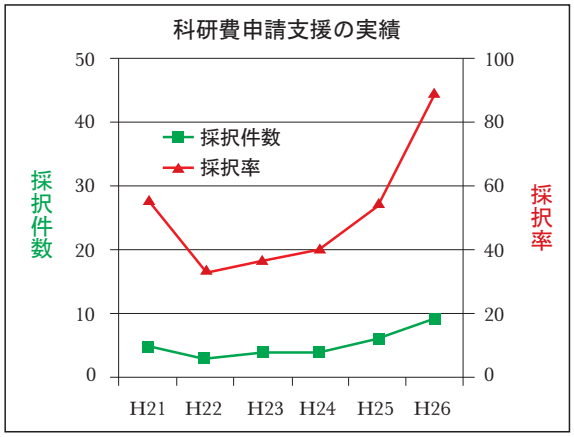

図２　実践センター教員の支援による科研費補助金採択の推移

図３　科学研究費申請を支援する Moodle ページ

連続で 10 件（10 名）の採択を受けていたが、残念ながら 2010 年度でこの事業は打ち切りとなった。

＜学会や研究会等での発表実績＞

これまでの実践センターで研修した内地留学生・院生の研究発表実績（発表年、タイトルなど）から発表件数を取り出して推移をグラフ化した。2006（H 18）年度と 2008（H 20）年度に学会発表が突出しているのは、学会の研究会等が三重県で開催され、実践センターの専任教員が会場校担当者・コーディネータを担ったことも影響している（平成 18 年度：日本科学教育学会および日本教育工学会の研究会、平成 20 年度：日本教育工学研究協議会全国大会）。

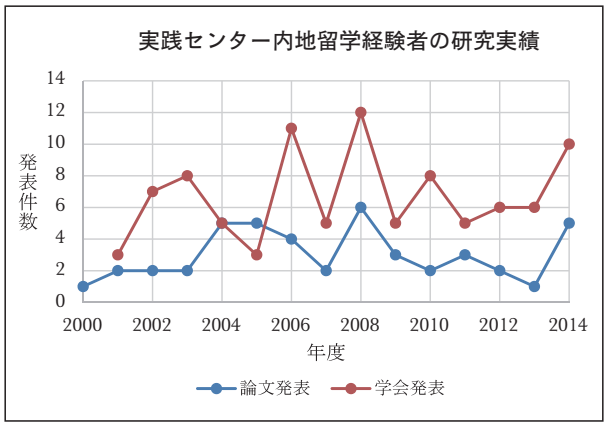

図４　内地留学経験者の研究実績の推移

＜ICT 夢コンテスト＞

学会発表に加えて　最近は、ICT 活用事例を表彰する日本教育情報化振興会が主催する「ICT 夢コンテスト」への応募を推奨しているが、内地留学経験者の ICT 活用実践が2013 年度は 2 件（奨励賞）、2014 年度は 4 件（NHK 賞、宮島龍興記念教育賞、奨励賞 2 件）が入賞するなど、研究成果が実りつつある。

（http://www.japet.or.jp/Top/event/yume/yume_comment/）

５．内地留学経験者から見た教員研修プログラムの評価

５．１　「内地留学で得たもの」のアンケート結果

これまで実践センターで企画・実施してきた研修内容について、現在・過去の内地留学生にアンケート（選択、自由記述）を行った（2010.2 実施）。その結果を図 5 に示す。内地留学の経験を振り返って、どのような力（成果）が得られたかについて、7 項目、5 段階評価（「5：とてもはい」～「1：とてもいいえ」）で回答を得たものである。

図 5 から筆者らが目標としたすべての項目に、4 以上の高い肯定度が得られた。その中でも、「新しい人間関係が得られた（つながりが拡大した）」「新しい知識や技術が身についた」「新しいものの見方や考え方が身についた」が最も高い 3 項目である。

自由記述からも、「研究のしかた、発表のしかたが学べた。これらは現場ではなかなか学べない。」「自分の実践を振り返り、共に考えてもらえる時間、場、仲間が得られて、自分の考えが深まった。」「現場で実践できる新しい技や考え方をたくさんもらった。」など、具体的なことがらがあげられた。

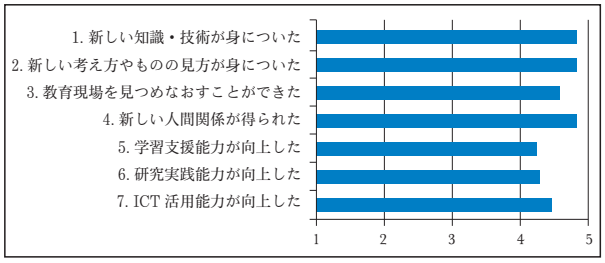

図５　内地留学の研修成果（N=12 2010. 2 実施）

５．２　自由記述からの評価

＜教育・研究支援プログラムについて＞

よかった教育・研究支援プログラムとしては、「センター行事やイベントを通しての交流」「授業への参加」があげられた。

「センター行事やイベントを通しての交流」が評価されたことは、内地留学で得たものの第 1 位「新しい人間関係が得られた」とも対応しており、興味深い。研究・研修活動における仲間の重要性を物語っている。

逆に、教育情報化コーディネータの資格を得るための勉強会であった「情報化コーディネータ学習会」はあまり評価が得られなかったこともあり、現在は研修プログラムから除外している。

＜印象に残ったことがら＞

「アカデミックフェアポスター大賞をいただけたこと。連日頑張って取り組んだものだったので、大変嬉しかったです。」「発表やコンクールなどへの参加を通して、自

分の考えを発信する機会を与えていただいたことは日頃の学校現場では経験できない貴重なことだった」「科研申請を書くための研究のまとめ方」や「国内外の学会への参加や論文の作成」など多くがあげられた。

＜改善を期待したいことがら＞

自由記述やインタビューから、「内地留学の制度そのものが知られていないこと」「もっと多くの人に内地留学を経験してもらいたい」「研修終了後の居場所がほしい」などの意見・要望が寄せられた。アカデミックフェアやアイサープ研究会などのイベントを通じて、もっと内地留学制度や実践センターの活動を内外に広報していく必要がある。

6．まとめと今後の展望

2015 年 4 月に実践センターは教職支援センターへの改組が予定されている。この機会に、これまで実践センターで内地留学生を対象に実施してきた教員研修プログラムおよび実績をまとめた。これらの資料は Web サイトで発信したり、今後の教員内地留学生への参考資料だけでなく、大学院で新たに始まる「教職実践プログラム」としても活用できると考える。

内地留学生とは日常的に接しているが、「現場では考えを深める時間、場、仲間がない」「現場では、研究能力・発表能力を鍛える機会が少ない」「現場に戻って、大学での経験が評価されにくい」などの声を聞くにつけ、大学が「自主的・長期的研修」を支援する必要性、「実績を広く PR する」必要性を強く感じる。そして、現在の教員研修プログラムを現場のニーズにこたえられるように改善していくとともに、実践研究の重要性を学校現場に認識してもらうことが必要である。

また、教員内地留学制度、教員が応募できる科研費申請（奨励研究）など、学校現場にその存在すらあまり知られていないことはとても残念である。最近、大学教員の科研費申請は奨励されて組織的に支援されるようになったが、現職教員の科研費申請への支援も組織的に取り組めば、大きな成果が期待できるのではないだろうか。そして、学校が大学教員の支援のもとに組織的に研究に取り組めばもっと教育実践研究が進むにちがいない。

実践センターの現職教育と他の活動（学部授業・卒研指導など）との連携を強めて、充実・発展のための努力を続けたい。

＜付記＞

本稿は、平成 21 年度 三重大学教育 GP 成果報告「参加型教育を促進する現職教員研修プログラムの開発―教育学部の現職教育機能拡大と連携強化―」[2] に加筆修正したものである。

参考文献

1）下村　勉、織田揮準：自主的研究会「学習支援研究会」の 10 年間の歩みと今後の課題　三重大学教育実践研究指導センター紀要 16　1996

2）下村　勉：参加型教育を促進する現職教員研修プログラムの開発―教育学部の現職教育機能拡大と連携強化―、平成 21 年度 三重大学教育 GP 成果報告 2010.3